——ヨハンナ・スピリ原作——

ハイディ（第五回）

東京女子高等師範學校教授　津田芳雄譯

ハイディは戸をあけて、小さい暗い部屋に入つた。そこには爐が一つと木の棚の上に皿が三四枚置いてあるばかりだつた。この家の臺所だつたのである。それから又一つ戸をあけて、奥の矢張小さい部屋に入つた。この家はおぢいさんの山の小屋と違つて、萬事が手狹で、みすぼらしい古い古い家だつたのである。入口の間近に机があつて、一人の女のひとが、見おぼえのあるペーテルのちよつきにつぎをあてゝゐた。隅の方に腰のまがつたおばあさんが絲をつむいでゐた。ハイディはこれが屹度おばあさんだらうと思つて、そばによつて云つた。

「おばあさん、今日は。あたし、やつと來てよ。隨分待たしたでせう」。

おばあさんは顔をあげて、ハイディの差出した手を手さぐりして、探しあてたら、それをなで廻してから

「お前がアルムをぢさんの所にゐる子かい、ハイディさんかい。」

「さうよ。おぢいさんに今、橇に乘つけて來てもらつたところよ」

「そんなことがまさか。おや、でも暖かい手をしてゐるね。ブリギッタや、アルムをぢさんがこの子をつれて來たのかい」

ペーテルのお母さんは仕事をやめて、立上つてゐたが、この時ハイディを頭から足の先までじろ

〻〳〵見ながら云つた。

「をぢさんが自分で來たのかぞうか、わたしは知らないけれど、そんなことがあるでせうか。この子がなにか間違へてゐるんでせう」

「だつて、をぢさんがわたしを布團にくるんで、橋に乘つけて來たんだもの」

「それぢや、夏ペーテルが話したことはほんとなんだね。それにしても嘘のやうな話だよ。この子は三週間と山には續くまいと思つてゐたのに。どんな子だい、ブリギッタや」

とおばあさんは尋ねるとブリギッタは、

「アデライデのやうにすらりとしてゐますよ。眼の黑いところや髪のちゞれてゐるところはお父さんやおぢいさん似よ」

と、目の見えないおばあさんに云つて聞かせた。そんな話のあつてゐる間、ハイディはぼんやりはしてゐなかつた。彼女は部屋を見廻して、中にあるものをみんな注意してゐたが急に大聲を出した。

「おばあさん、雨戸が一枚ぶら〳〵になつてゐてよ。おぢいさんだつたら釘を一本打つて直ぐになほしてしまふのに。でないとガラスがこはれるから。御覽なさい。ほら、がたん〳〵云つてゐるでせう」

「あー、ハイディさん。わたしには見えないんだよ、だけどその音は聞えるよ。雨戸ばかしぢやない。この家のものは何もかもがた〳〵でね、風の吹く時は大變なんだよ。夜中にほかの二人が眠つてゐてもわたしだけは眠れないことがある。家が今につぶれて、わたしたちが死んでしまひさうでね。だけど、誰も繕つてくれる人はない。ペーテルにはそんなことまだ出來ないしさ」

「だつてどうしておばあさんにはあのぶら〳〵してゐる雨戸が見えないの。それ、御覽なさい。またがたんと行く。あの戸さ」

さう云つてハイディはその雨戸を指した。

「あー、ハイディさん。雨戸ばかしぢやないんだよ。わたしには一切が見えないんだよ」

とおばあさんは悲しさうな聲で云つた。

「だつて、わたしが外へ出て、あの雨戸をさめて來て、部屋を明るくしたら見えるでせう。」

「いや〳〵それでも駄目。誰もわたしの目をもう明るくすることは出來ない」

「でもそこの白い雪の中に出たら明るいでせう。ちよつと來て御覽なさい。わたしが見せてあげるから、おばあさん」

ハイディはおばあさんの目にあかりが無いと思ふと悲しくなつてきて、おばあさんの手をとつて引張つて行かうとした。

「ほつといておくれ、いゝ子だから。わたしにはいつも暗闇ばかりなんだよ。雪の中に出ても、日なたに出ても、わたしの目に光が入ることはないんだよ」

それでもハイディはこの悲しいことを何とかのがれる方法はないかと頻りと色々のことを尋ねたけれど、結局「わたしにはもう、この世で光は無いんだよ」とおばあさんに聞かされて泣き出してしまつた。ハイディは滅多に泣かないけれど、泣き出したらなか〳〵やまなかつた。それでおばあさんはそれをなだめるのが大變だつた。おばあさんもハイディにかうして泣かれるのが辛いので、とうとうかう云つた。

「さあ、ハイディちやん、目が見えないと、やさしい言葉がどんなに嬉しいものか、お前にはわかるまい。わたしにはお前の話を聞くのがとても樂しいんだよ。だからこゝへ腰を下して何か話しておくれ。お前、山の上でどうしてゐるの、また、おぢいさんはどんなことしてゐるの。昔のことはよく知つてゐるけれど、もう長いことあの人の樣子を聞かないから。ペーテルからは時々聞いたけれど、あの子はあまり物を言はない子でね」

これでハイディはいゝことを思ひつかせてもらつたので、直ぐに涙を乾かして、今度はおばあさんを慰めて云つた。

「わたし、おぢいさんに何もかも云つてよ。それまでおばあさん、待つてゝね。おぢいさんが屹度おばあさんの目をなほして下さるわ。そして家も

倒れないやうに何とかして下さるわ。おぢいさんは何でもおばあさんのもの、なほして下さるわ」

おばあさんはそれに對しては何とも云はなかつたが、ハイディはそれからおぢいさんと自分の生活の樣子を上手に話し出した。山羊たちと山で暮した日のこと、冬になつてからの毎日のこと、おぢいさんが盥やお椀やスプーンまで何でも手まめに上手に拵へること、それをまた自分がそばで眺めて面白がつてゐることなど、いよ〳〵興に乘つて話しつゞけた。おばあさんはじつとそれに聽き入つて、時々娘にかう話かけるだけだつた。

「ブリギッタや、聞いたかい、今のをぢさんの話を」

そこへ戸口に重い足音がして、ペーテルが歸つて來た。彼はハイディを見つけて眼を圓くして驚いた。それからハイディに「ペーテル今日は」と云はれてにつこりした。

「おやもう學校がひけたのかい。今日みたいに早くたつた午後はない。ペーテル讀方は進んだかね」

おばあさんが尋ねると、

「おんなじさ」

といふ答である。おばあさんは溜息をついて「もう、ちつとは違つたことを云つてくれる時だと思つたのに。この二月には滿十二になるぢやないか」

「もうちつとは違つたことつてなあに？」

ハイディがまた尋ねると、おばあさんはかう云ふのだつた。

「もう少しは字が讀めなくちあならん時だが、と云つたのさ。あの棚の上に古い祈禱書があるが、その中に美しい歌が幾つも書いてあるんだよ。わたしは久しうそれを聞かせてもらはないから忘れてしまつて、自分で云つてみることも出來なくなつた。その一つでも時々讀んで聞かせる位にはペーテルが直ぐになつてくれるだらうと思つてゐたのに。この子はまだなんにも讀めないんだよ」

そこへまだチョッキのつくろひをしてゐたペーテルのお母さんが

「ランプをつけませう。暗くて見えなくなつて來

たから。わたしも今日のお晝からは隨分短かゝつたやうに思ふわ」
と云つた。するとハイディは急に立上つて直ぐとおばあさんに手を差し出しながら
「おばあさんおやすみ。暗くなつて來たからわたしもう歸るわ」
と云つて、ペーテルとそのお母さんにも「さよなら」をして戸口に向つた。おばあさんは
「ハイディちやん、ちよつとお待ち。そんなにひとりで行つちやいけない。ペーテルや、送つておいで。ころばないやうにね。じつと立たしちやいけないよ。凍えるといけないから、いゝかい。頸に卷くものはあつたかね。」
と色々心配した。
ハイディは「無いけれど寒くないわ」と云つて家から駈け出した。ペーテルもそれを追ひかけて跳び出した。けれどおばあさんはまだ心配。
「ブリギッタやハイディを追掛けておくれ、あの子、こんな晩に、凍えてしまひさうだよ。さあ、早くこのわたしのショールを持つて行つておくれ」
ブリギッタは駈け出した。が子供たちが五六歩も行つたか、と思ふ頃おぢいさんが迎へに山を下りて來てゐた。
「あー、よろしい。約束を守つたね、ハイディ」
おぢいさんはさう云つて、ハイディを麻の大袋にすつかり包んでから、抱き上げて、その儘すたゝと山を登つて行つた。ブリギッタはやつとこの樣子を見るのに間に合つた。そしてペーテルとうちに入つておばあさんにその驚いた話をした。おばあさんも同じやうに驚いて「神樣、あの人があの子にそんなにやさしくしてくれることを感謝致します」を何度もくり返した。それから「をぢさんはまたあの子をこゝへ來させてくれるか知らん。本當にあの子はわたしを慰めてくれたよ。なんて可愛い心をしてゐる子だらう。あの子の話を聽いてゐると本當に面白い」と云つて寢床に入るまでハイディのことを欣んだ。寢床の中でまで「また

來てくれるといゝが。まだこの世はあきらめたものでなかつた。樂しいことが殘つてゐた」と云つてゐる。ブリギッタもそれに合槌をうちペーテルも一々おばあさんの言葉にうなづいて見せて「僕がさう云つたらうが」と嬉しさうに大きな口を開いて笑ひながら云つた。

一方、ハイディは袋の中から頻りと何かおぢいさんに向つてしやべつてゐたが、頭から包まれてゐるので少しもそれが分らない。それでおぢいさんは

「うちに着くまでお待ち。うちでみんな聞かせてもらふよ」

と云つてだまらせた。所がうちに着いて包から出されるが早いか、ハイディは

「おぢいさん、明日わたしたちは槌と長い釘を持つて行つて、おばあさんのうちの雨戸を打ちつけなくちやいけないわ。また、ほかにも方々釘を打たなくちやならないわ。おばあさんうちは家中がガタ〳〵で搖れるから」

「さう？ぢやさうするかね。だが誰がさう云ひつけたんだね」

「誰も云ひつけたんでないの、だけど家がくずれさうだもの、おばあさんは晩、眠れない時はひどい音がしてゐて、家が今に頭の上に落つこちて來さうで、がタ〳〵震へていらつしやるんだつてよ。それにおばあさんは目が見えないのよ。何もかもまつ暗だつてよ。可哀想ね。誰もおばあさんを明るくして上げることは出來ないとおつしやるの。だけどおぢいさんには直してあげることが出來るでせう。明日行つて直してあげようよ、ねえおぢいさん」

子供はおぢいさんにしがみついて信用しきつたやうな目でおぢいさんを見上げてゐた。おぢいさんは暫く何とも云はないでその目を見下してゐたが、やがて

「さうだ。ガタ〳〵いふ音の方は止まるやうにしてみよう。せめてそれだけは出來るだらう。明日下りて行かうね」

子供は悦んで部屋を跳び廻つた。

「明日行くのね、明日行くのね」

おぢいさんは約束を守つた。翌日の午後になつて、橇を引出して來て、前の日のやうにおばあさんの家の戸口でハイディを下して、

「さあお入り、暗くなつたらまた出てくるんだよ」さう云つて、麻の袋を橇に入れて、家の外を廻つた。

ハイディが戸をあけて部屋に跳び込むが早いか、おばあさんは隅の方から

「あー、來てくれた、來てくれた。」

と悦んで絲も紡車もほつて、兩手を差出して迎へた。ハイディは走りよつて、腰掛を引よせ腰を下して早速、いろんなことを話したり、訊いたりし出した。すると、突然、小屋の壁にがたん〳〵といふ響がした。おばあさんはびつくりして、聲を震はせて、

「あー、大變だ、家がいよ〳〵くづれて來た」と叫んだ。けれどもハイディがおばあさんの腕をとつて、

「いえ、いえ、怖がることはないのよ、おばあさん。おぢいさんが槌を使つてゐる所よ。そんな心配がないやうに、おぢいさんがあちこち直してゐるだけよ」

と云つて宥めた。

おばあさんは「まあ、本當だらうか」と云つて二度びつくりした。

「ブリギッタや、見ておいで、おぢいさんだつたら御禮を云ひたいから、ちよつとうちに入つて下さいとお云ひ」

ブリギッタが出て見ると、おぢいさんは丁度新しい厚い板を壁に打ちつけてゐる所だつた。ブリギッタはそばに歩みよつて、

「をぢさん、今日は。こんな御親切をして下さつて。お母さんも、わたしも本當に有難く思ひます。お母さんがお禮を申したいですつて。ほかに誰がそんな御親切をわたしたちにして下さる人がありませう。本當にわたしたちは御親切を忘れは致し

―」

「もうそれでいゝよ。」とをぢさんは遮つて「聞かなくたつて、お前たちがこのアルムのをぢをどう思つてゐるか位、分つてゐるよ。うちへお入り。直す場所は自分で見出せるから」

みんなが怖がるをぢさんにさう云はれたものだからブリギッタはすぐ〳〵とうちに入つた。おぢいさんはその仕事を續けて、屋根の上にまで上つて方々直した。が、たうとう持つて來た釘も使ひ盡し、暗くもなつて來たので下に下りると、殆ど同時位にハイディが出て來た。をぢさんはハイディを例の麻の袋に包んで抱き上げ、後に橇を引きずりながら山を登つて歸つて行つた。

かうして長い間嬉しいことも變つたこともなく、毎日同じやうに暗い退窟な日を送つてゐたおばあさんにも、久しぶりに樂しい日が來た。この冬は毎日、おばあさんに何か樂しみにして待つものが出來た。夜があけると足音はしないかと聞耳を立てる。戸のあく音がすれば子供が來てゐる。それから子供の色々面白い話を聞いてゐるうちにいつの間にか日が暮れてしまふ。おばあさんは「まだ夕方にはならないかい」などといふ以前の言葉は忘れてしまつた。ブリギッタも「今日はお晝をぬいたやうね」とよく云つた。ハイディもおばあさんが大變好きになつて、とうとうおばあさんの目は誰にも直せないことが分つた時にはひどく泣いて悲んだ。が、おばあさんは「ハイディちやんが來てゐてくれると、目の見えないことなど忘れてしまふよ」と云つて宥めた。

かうしてお天氣の好い日には必ずハイディが來た。おぢいさんも一度も反對しないで、ハイディを橇で送つてくれた。それだけでなく、おぢいさんは橇の中に槌やいろんな物を入れて來て、何度もこの山羊飼小屋の修繕をしてくれたのだつた。それで夜通し家がが た〳〵ギー〳〵鳴ることもなくなり、おばあさんはよく眠られるやうになつて「アルムをぢさんのして下さつたことは決して忘れない」と云ひ云ひした。